

去勢女医

性犯罪者が手術を受けようとした
女医は元被害者だった！

地獄の去勢リンチが始まる！

玉潰しの果てに男を待つのは
チン切り去勢綱引き！



玉子王子 著

1章 患者＝元レイプ魔・女医＝元被害者

局部麻酔をうまく使い、意識と痛覚だけ残す事に成功した。

そして、今手術室にいるのは、かなりの巨乳を持つ女医と患者の二人だった。

女医の個人診療所。

巨乳美人の診療所として、結構有名だ。

しかも、独身で男の噂も無いので、ある種のアイドル的な存在でもある。

ナノテクノロジーの発達した現在、個人の診療所でも結構手術などは行える。

患者は、三十少しの男。

背中に刺青もある、しかしヤクザではない。

ただの半端なチンピラだった。

ベッドに布を掛けられて寝ている。

胴体と、足の辺りを掛け、股間にはかかっている。

白衣の女医が声をかける。

「佐藤さん、動けますか？」

「いや、全然……」

盲腸の治療。

盲腸を切り取り、ナノマシンに特別なコードを与えて、その部分は再生させない。

コードは特定のものしかない。

女医にとっては残念だった。

——チンピラ治らないようにしたりは出来ないものね。

患者を見下ろす。

盲腸の治療のため、下半身の毛は剃り上げられている。

剃るとき、若いナースにしてくれと注文してきた。

そして、その通りになると、剃毛時自分のモノを示して聞いたという。

彼氏のとどっちが大きい、と。

最悪の人間だろう。

——デカイわ。

女医、石森。

三十歳。

結婚していないし、恋人はいない。

五年以上前、佐藤に犯されてから男に触れていない。

触れられなくなった。

見下ろす。

佐藤の、剥きだしの肉玉を。

——こんなキ〇タマ、一生なくしてやりたい。

それは無理だ。

コンビニで二百粒千円でナノマシン治療薬は買える時代だ。

そして、一粒飲めば肉玉ぐらいは十時間で治ってしまう。

盲腸やその他病気のために切除した内臓のように再生させないコードがあればいい。

しかし、肉玉はもちろん、他の体の一部を欠損させ、そのままにするコードはない。

マスクの下で、唇を嚙む。

——結局、こいつを去勢したままにする方法はないのよ。

証拠は整っている。

この病院に来たはじめの日に、まさかと思った。

顔だけではわからないと、上手く DNA を採取し、医者として自分で取っていた犯人の DNA と比べた。

比べるのは、簡単な機械がやってくれるので別に彼女の手柄ではない。

何度も検証したが、常に一致した。

それほど親しく話したわけではないが、彼の言動もレイブ魔だとしてもおかしいとは思えないタイプのそれだった。

そして今日。

見下ろす。

身動きできない患者の男性器を。

——これは、あの時のだ。

立った状態で、二十センチはあった。

萎えたいまでも、十五センチほどもある。萎えた状態の平均は七センチという説もあるのだ、自慢したくなる巨大さだろう。

その大きさと、特徴的なほくろ。

DNA の一致。

そして何より、犯行時チラッと見た顔が今ふてぶてしく寝ている患者の顔と同じだ。

「へへ、俺のデカイでしょ？ 見とれちゃった？」

「ええ、ご立派ですね」

「あら、マジで？ それじゃ、旦那さんのより俺の方が？」

「どうですかね。こうして見ないと」

「え……」

肉玉に手をやる。

そして、握り潰す。

「ちょ、あ……おぐうっ！ やめっ」

顔を僅かに動かす。話せるように、その辺だけ麻酔を効かないようにしていた。

医療用ナノマシンを使えば麻酔医で無い石森にも、それは簡単だ。

だが、ほかの部分は指一本動かせない。

しかし、痛みだけは十分にある。

—どう？ キ〇タマ握り潰されるのは？ 女の私にはよく分からないけど、女にしかわからない苦しみを味わわせてくれたあんたにはお似合いよね。

—どう？ **キ〇タマ握り潰される** のは？

女の私にはよく分からないけど、
女にしかわからない苦しみを味わわせてくれた
あんたにはお似合いよね。



「んぎいいいっ！ や、やめ……やめろっなんで……」

「あら、大丈夫ですよ。加減してますし……」

耳元に口を近づける。

「万一、**コ・ウ・ガ・ン・が潰れても**

ナノマシンで治りますから」

「んぎいいいっ！ や、やめ……やめろっなんで……」

「あら、大丈夫ですよ。加減してますし……」

耳元に口を近づける。

「万一、コ・ウ・ガ・ン・が潰れてもナノマシンで治りますから」

「ぎ、ぎけんな……」

汗が浮き出す。

今すぐ死んだ方が楽、というようなどす黒い顔になり、人間の顔に出来るとは思えないよう無いような皺が浮いてくる。

唾を飲む石森。

—いいわ、このぐらい苦しんでくれないと。でも、まだまだよ。

「はい、それじゃ」

「はっ！ ぶ、ぶっ殺す！」

「あら、そんなに怒らないで下さい。立派なペ〇スが泣きますよ」

いいながら、股間に物差しを押し付ける。

「ん……平時七センチと」

「ふ、ふざけんな、縮んでんだよ」

「あら、ご存じない？ ペ〇スのサイズ測定は公平を期すために、できるだけおなじ条件にするんですよ」

もちろん、嘘だ。

「睾丸を握り締め、最小まで縮めたモノが縮んだ時の大きさ。平時だと弛んだり締まったりいろいろですからね。男性ならお分かりでしょうけど」

「そ、そうなのか？」

「うふふ、平時七センチは普通ですね。でも、平時は普通でも大きくなったらかなり……という人も多いみたいですけど」

「へへ、日本人は小さいって言うけど、俺は別なんだ」

「あら、それは間違った情報ですよ。昔、何の測定かわかってない人が萎えた状態の数字を出したから、平均が低くなっただけですって。その話が、そういうのを喜ぶ人たちに広められて……あっ」

よろける振りをして、肘を股間に叩きこむ。

「おぐっ！」

ゴリっ、と肉玉がいい音を鳴らす。

——いい音！ でもツルッと逃げて、キ〇タマ潰せなかったわ。うふふ、そう来なくちゃね！ そらそら！

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、股間を臼のように見立て、肘で玉を磨り潰す石森。

「あああああああああああああああああああっ！」

絶叫するが、のたうつことすら出来ない、身動きも取れない佐藤。

涎が飛び、目が血走る。

「あらあ、ごめんなさい！ 泣きそうじゃないですか……肘が当たったぐらいで、立派なペ〇スをお持ちの、頑丈な成人男性が大げさな……」

「ああ、ごめんなさい！ 泣きそうじゃないですか
.....肘が当たったぐらいで、立派なペ〇スをお持ちの、
頑丈な成人男性が大げさな.....」

「き、キ〇タマに当たったんだよ！ わかるだろ！ 当たってただろ！」

「あら、そういえば.....でもですね、実際の所、
睾丸ってそんなに痛いんですか？」

「な、なんだと？ 女に何がわかる！？」

涙を流し、唇を震えさせて抗議する佐藤。とぼける石森。

「いや、そこなんですよ。女にはわからない、
だから大げさに言ってるだけじゃないかって。

いや、睾丸が急所なのは認めますよ？

でも、女に攻撃されないように、男が示し合わせて
大げさに行ってるんじゃないかって.....だっけこう」

デコピンを肉玉に打ち込む。全力だ。



「き、キ〇タマに当たったんだよ！ わかるだろ！ 当たってただろ！」

「あら、そういえば.....でもですね、実際の所、睾丸ってそんなに痛いんですか？」

「な、なんだと？ 女に何がわかる！？」

涙を流し、唇を震えさせて抗議する佐藤。

とぼける石森。

「いや、そこなんですよ。女にはわからない、だから大げさに言ってるだけじゃないかって。いや、
睾丸が急所なのは認めますよ？ でも、女に攻撃されないように、男が示し合わせて大げさに行っ
てるんじゃないかって.....だっけこう」

デコピンを肉玉に打ち込む。全力だ。

「おぐっ！ あ.....な、なにしやがる！」

「ほらあ！ デコピンを睾丸にやられたぐらいで、その反応は大げさでしょ？」

肉玉を持ち上げる。

弛んでいた。

実は、陰囊手術用の経口弛緩剤を投与している。

どれほど衝撃を受けようと、怯えようと、今日一日ぐらいは肉袋が縮むことはない。

「ほら、わかります？ 天井の鏡でわかりますよね？ うふふ、佐藤さん、睾丸も大きい」

「そ、それが何か……ん」

「そう、縮んでないんですよ。本当に打撃を受ければ、ここは縮むんですよ？」

「そ、それは……麻酔の影響……ん？」

「なんですか？」

「麻酔されてる割には、痛いぞ？」

「そりゃ、睾丸は急所ですから。それに、盲腸の手術ですからね、男性器周辺にまで麻酔は行ってないんでしょう」

「でも、身動き取れない……」

「必要部分にちゃんと効いていれば、周りの効きはまだらなものですよ」

——って、言ってる意味がわからないわ。

「とにかく、立派な金袋がゆるゆるであることが、大して痛くない証拠ですよ」

「い、いや……本当に……おぐっ！」

「またまた！ タマタマ！」

パン、と軽く弾くように肉玉を打つ。

打って放す、それを素早くやった方が軽く叩くなら痛いという話もある。

顔を引きつらせ、一瞬何もいえない佐藤。

数秒後、絶叫する。

「あぎゃあああああああああああああああああっ！ キ○タマあああああああああ！」

「あははは！ おかしい！ ナイスですよ！ ペ○スがでかくてその面白さ、モテモテでしょ！」

「あ、あぎ……ち、違う……誤解、誤解だ……」

「うふ、それじゃそろそろ手術始めますね」

「うううう」

啜り泣きを始める佐藤。

——うふふ、刺青なんて入ってるチンピラでも、キ○タマ責められたらこんなもんよね。所詮男なんて動けなくされたら女より脆弱なのよ、こんな弱点ぶら下げてるんだもの。

自慢の一物は、さらに縮み上がっている。

ただ、先端部だけは大きく変わらないので、元が巨大であることを示してはいた。

——生意気ね……デカイのがいいとは思わないけど、男は自慢なんですよ。

考えつつ、メスを取る。

「じゃ、いきますよ……」

と、息を吸い込む。

演技である。

「はくしょん！」

「ひっ！」

くしゃみの演技と同時に、ビュン、とメスが宙を切る。

「お、おま……気をつけろ！」

メスは佐藤の股間の上を通過していた。

もちろん、言うまでもなくわざとだ。

心底恐怖している佐藤の顔に満足しつつ、叫ぶ。

「あっ！ すいません佐藤さん！」

「あっ！ すいません佐藤さん！」

「え」

「ペ〇スが取れちゃいました！」

男性器、おチンチ〇、マラ、男根……佐藤さんの男性のシンボルが今のメスでスパッと！」

「ひいひいっ！」

大嘘に、震え上がる。

空振りしただけなので、痛くないはずだ。だから切れていないことはわかるだろう。しかし、ことが重大だけに、そして医者が嘘を言うとも思っていないのだから、あっさり信じていた。

その反応にほくそえみながら、石森は手を股間の上にやり、鏡で見えないようにする。

同時に、その手に持っていた血糊を股間にまく。

「大丈夫！ おチンチ〇ぐらいすぐナノテクで繋がりますから！」

「は、はやくしろ！」

——痛くないでしょう、大泣きじゃない。

よっぽどおチンチ〇って大事なのねえ。

鬩した手で一物を掴み、引っ張る。

「いいてええええ！ いいてえよ！ チ〇ポがあああああ！」

「切れたんだから痛いに決まってるでしょ！ 落ち着いてください！ 全身の体積を考えれば、数パーセントの損害ですよ！」

「どげんなあああああ！ ち、チ〇ポだぞ！ チ〇ポが切れたんだ！」

「治ります……あっ」

「なんだよ！？」

「すいません、ナノマンの誤作動で……ペ〇ス周辺の情報が固定されちゃいました」

「治るんだよな！？」

「ごめんなさい！ もう治りません！ お詫びに、女性器形成しますから！」

睾丸も抜いて、ぜひ性転換を……」

「え」

「ペ〇スが取れちゃいました！ 男性器、おチンチ〇、マラ、男根……佐藤さんの男性のシンボルが今のメスでスパッと！」

「ひいひいっ！」

大嘘に、震え上がる。

空振りしただけなので、痛くないはずだ。だから切れていないことはわかるだろう。

しかし、ことが重大だけに、そして医者が嘘を言うとも思っていないのだから、あっさり信じていた。

その反応にほくそえみながら、石森は手を股間の上にやり、鏡で見えないようにする。

同時に、その手に持っていた血糊を股間にまく。

「大丈夫！ おチンチ〇ぐらいすぐナノテクで繋がりますから！」

「は、はやくしろ！」

——痛くないでしょうに、大泣きじゃない。よっぽどおチンチ〇って大事なのねえ。

翳した手で一物を掴み、引っ張る。

「い、いてええええ！ いてえよ！ チ〇ポがああああああ！」

「切れたんだから痛いに決まってるでしょ！ 落ち着いてください！ 全身の体積を考えれば、数パーセントの損害ですよ！」

「ざけんなあああああっ！ ち、チ〇ポだぞ！ チ〇ポが切れたんだ！」

「治ります……あっ」

「なんだよ！？」

「すいません、ナノマシンの誤作動で……ペ〇ス周辺の情報固定されちゃいました」

「治るんだよな！？」

「ごめんなさい！ もう治りません！ お詫びに、女性器形成しますから！ 睾丸も抜いて、ぜひ性転換を……」

性転換は脳の性と合わる形でのみ行える。

性転換という口実で去勢しようとしても無理なのだ。

が、そんな細かいことは佐藤は知らない。

「ひいいいっ！ やめてくれ！」

「でも、ペ〇スが無いんじゃタマタマだけあっても仕方ないでしょ？」

グニグニと、縮み上がるだけ縮み上がった一物を握って弄びながら、泣き喚く性犯罪者を見下ろす。マスクの下では、歪めるだけ顔を歪めて笑っている。

「頼む……何とかしてくれ……」

「仕方ありませんね……ん、あ」

「なんだよ！」

「よく見たら、血が出てただけでした！ ペ〇スは無事です！ ほら！」

「わからねえよ！」

血糊で股間はべたべただ。縮んだ一物もその中に埋もれている。

タオルでぬぐって、やっと一物が無事なのが鏡に映った。

「あ、あ……」

「よかった！」

「よくねえ！」

「え？ じゃあ性転換します？」

「ふざけんな！ ぶっ殺す！ 麻酔がとけたら！」

「うふふ、なんでですか？」

「な、なんでって……おまえ……おまえ……」

「ぶっ殺したいのは、こっちなんですよ？」

マスクを下ろす。

顔を見せても、何の反応も無い。

「顔覚えたぞ！」

「……覚えられないでしょう。何しようと、女の顔なんて覚えられない人間でしょう？」

肩をすくめる。

「こっちは、五年前から忘れられないんですよ」

マスクを戻す。

顔を見せても無駄だ。

「五年前……」

とある公園の名前を挙げる。

やはり、何の反応も見せない。

「そこで、一人の駆け出しの女医がレイプされたんです……」

ゴチャ。

拳を握り、股間にたたきつける。

「おぐおあああっ！」

「この腐れチ○ポにね！」

掴み、引っ張る。

メスを握り、その腹を引っ張った一物の茎に押し付ける。

メスを握り、その腹を引っ張った一物の茎に押し付ける。
「チ○ポ切り落とす！ そのあとキ○タマも抜いて去勢してやる！」

「や、やめ……俺じゃない！ 俺は知らないっ！」

「DNA鑑定でわかってるんだよ！ このレイプ魔！

レイプ魔にこんな立派な男性器はもったいないよねえ」

「違う、俺じゃない……」

叫びつつ、佐藤は思い出していた。
レイプなど月一ぐらいの楽しみで相手を一々覚えたりしないが、
いい女を上手くやれたときには印象に残る。

若い巨乳で、どうもそこそこのいい仕事をしていそうな女を
犯したことがあった。

証拠になるのも気にせず、
犯されてぼろくずのように転がっている石森の写真を撮って
今も携帯の中に入れてる。



「チ○ポ切り落とす！ そのあとキ○タマも抜いて去勢してやる！」

「や、やめ……俺じゃない！ 俺は知らないっ！」

「DNA鑑定でわかってるんだよ！ このレイプ魔！ レイプ魔にこんな立派な男性器はもったいないよねえ」

「違う、俺じゃない……」

叫びつつ、佐藤は思い出していた。

レイプなど月一ぐらいの楽しみで相手を一々覚えたりしないが、いい女を上手くやれたときには印象に残る。

若い巨乳で、どうもそこそこのいい仕事をしていそうな女を犯したことがあった。

証拠になるのも気にせず、犯されてぼろくずのように転がっている石森の写真を撮って今も携帯の中に入れてる。

というか、犯した女は一律全員写真を撮るのだ、トロフィーとして。

見直すのは、印象に残るいい女だけだが。

——やべえ、そういや、あの女だ、この女医。

一年程度はよく見て楽しんでいたが、その後はまた別の女を上手く犯したのでそちらの写真ばかり見ていた。今見ているのも、半年前の女だ。

——く、糞が……こんな古い女のために、なんで……

よく分からない怒り方をする佐藤。

「やめてくれ、誤解だ！ 俺は女房一筋なんだ！ その前は童貞だった！」

真剣な顔で叫ぶ。

一瞬言葉に詰まる石森。

DNA 鑑定で、佐藤が犯人なのはわかっている。

だがそれでも、ここまで真剣に言い張られると元々善良な石森は悩む。

——こんなに……真剣に嘘つける人がいるかしら？

しかし、DNA 鑑定では確実に佐藤が犯人だ。

眉を顰める。

と、携帯の音が鳴る。

佐藤のものだった。

「あら、携帯が……」

「さ、触るんじゃねええええっ！」

ギョッと、いきなり絶叫した佐藤に驚き、まじまじとその顔を見る。

「……携帯……何かあるのね？」

「な、何もねえ」

普通にしていれば、まさか携帯の中に自分が被害に会った時の写真があるなどとは思わない。

今も、そんな事は思ってもいない。

ただ、何かあるらしいことはわかった。

ロックもされていない携帯を見る。

写真のフォルダの中に『幸運な女たち』というのがあった。

それを見て、真っ青になる石森。

どう見ても、犯された後で呆然としていたり、気絶している女たちの写真だ。

それだけなら、他人に貰ったものかもしれない。

だが、その前で佐藤が一物を掴み、ピースしている自撮り写真もある。

動かぬ証拠ではないか。少し見ていくと、自分の写真にも行き当たる。

ボロボロと、涙が零れ落ちる。

「な、泣いてんじゃねーよ」

キ○タマ潰してください！ お願いします！

そう嘆願するような佐藤の言葉に、目をそちらに戻す石森。

「警察に届ける前に……」

棚に歩いていく。

そして、手術道具をガチャガチャと銀色のトレイの上に載せ、台にガチャンと置いて押していく。

佐藤の股間の横まで押してきて、止める。

「届ける前に……男性器がナノテクで再生することを心から呪わせてあげる」

葉のせいで縮むことがない肉玉を、優しく揉みながら感情のない目をする石森。

体験版終わり

この後、どんどん女性が増えてきて集団去勢リンチとなります

しかしナノテクで完全治療可能な世界なので

一時的なファッション去勢となっております。

ただ、治るということは何度でも潰されるということでもあります

ラストのチン切り去勢綱引きで女性たちの気が済むまで、レイプ魔佐藤の地獄は続きます

続きは製品版でお楽しみください